

『広島文教グローバル』創刊号 巻頭言

グローバルコミュニケーション学科・学科長

森 下 要 治

広島文教女子大学人間科学部グローバルコミュニケーション学科から小さな雑誌をお届けすることになった。題して『広島文教グローバル』である。学科名称のキーワード「グローバル」を冠したのは、この雑誌が学科の学びの特質を体現すべく生み出されたものであることを自ずと表わしている。英語教育に関するもの、文学作品を対象とするもの、地域経済史、観光学、はたまた最近流行の能動学修等、内容は多岐にわたる。個々の論稿の内容についての評価は読者諸賢にお任せするほかないが、いずれも各教員の専門領域に係るものであり、稿者それぞれの独自性が発揮されているものと信ずる。

こうして本誌を構成する論稿は一応出揃ったわけだが、いま一つ、忘れてはならないことがある。それは学科名称の中のもう一つのキーワード「コミュニケーション」という言葉が意味するところについてである。

いわゆる「グローバル化」の進展は、単に言語、民族の違いや国と国の境を軽々と越境することを可能とするばかりではない。蛸壺化の批判にさらされてきた学問研究の来し方を「脱領域」というやり方で新たな段階へと導く効用をも期待できるはずである。「グローバル」と名乗るこの学科は、そのような可能性を内蔵して生み出されたものであった。しかし2010年4月の学科創設以来、果たしてその可能性を十分に生かしてきたか、はなはだ心許ない。本誌掲載の各論稿の学びの領域が相互に切り結び、新たな学びの地平を遠望するためには、「コミュニケーション」という考え方こそ肝要である。

『大学とは何か』（岩波新書、2011）を著した社会学者の吉見俊哉氏は、その「あがき」において、書名に掲げられた問いに対する回答を次のように示している。

—大学とは、メディアである。大学は、図書館や博物館、劇場、広場、そして都市がメディアであるのと同じようにメディアなのだ。メディアとしての大学は、人と人、人と知識との出会いを持続的に媒介する。（中略）大学を、所与の教育制度として捉える以前に、知を媒介する集合的实践が構造化された場として理解すること。そのように大学を再定義することで、大学をめぐる今日の窮状を打開する糸口をつかめるのではないか。

この小さな雑誌がメディアとしての役割を果たしてほしいと思う。そしてこの小

さな試みが人と人，人と知識の出会いをメディアとして媒介しながら，広い意味でのコミュニケーションを生み出し，顕微鏡に載せる小さなプレパラートに微細な構造がありありと見出せるように，新たな学びの可能性をありありと映し出すようになることを目論んでいる。